
徒然に行く

臥龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

徒然に行く

【Nコード】

N7686F

【作者名】

臥龍

【あらすじ】

コメディ初挑戦作品。コメディなのにシリアスになったりラブコメになったりと、作者が詰め込みたいことをとにかく詰め込んだ作品です。生暖かい眼で見えて下さいな（＾＾；）

01（前書き）

途中、クルマのネタが出てきます。 R32、R33、R34 ↑ これらが何を意味するのかが解れば問題ないかと。解らなくても楽しめますが、知っていた方が得です。

清々しい朝、これが平和なのと言わんばかりの透き通った空。

実際に平和なら最高の朝だ。

だけど、俺、さいじょうたいが西条大我の周りにはその平和をかき乱す変人、もといアホどもがいる。

それに…

…今日もテンションがあがらない日が始まるのだった。

「元気が、大我！」

「ぐほおっ」

俺は背中を殴られた。

その影響で、かけているメガネがズレる。

平手で叩くならまだしも拳で殴ることもないだろ。

「あいつかわらずテンション低いなあメガネ！」

「メガネは余計だ」

この朝からテンションが高いのは毛利けいり統也。

女好きの下ネタ大好き変態野郎だが、顔が良いので結構モテる。

なんか統也がついてくると、女子が顔を赤くしてこっちを見ている。

あんまり目立ちたくない俺にとっては迷惑だ。

髪を金髪に染めているのに一度も指導を受けていない不思議な奴でもある。

「昨日の夜さーノゾミがさあ」

また、昨日の夜の話を始める。

毎朝の恒例行事だ。

しかも、出てくるのは毎度違う名前。

呆れるしかない。

「でさあ…ってうわあっ」

統也が前方に飛んで行き、俺の横に一人の女子が転んでいた。

「あたたた…」

そっいつて起きあがったのは、おだまみ小田真美。

容姿は悪くないのだが、男勝りで負けず嫌いなので姉御と後輩から慕われている。

「あっ…」

「どうした？」

真美は俺の視線に気付くと急いで立ち上がり、制服に付いた塵を払った。

「見た？」

「見てねえ」

「見せたくて見せた訳じゃないから…」

そう言くと、真美は走り去ってしまった。

倒れている統也をしっかりと踏んづけて。

「ったく。見てねえっての」

俺は統也に歩み寄った。

「おい、大丈夫か？」

「フッフッフ…ツンデレ真美のスカートの中、見えたぜ…」

天国にいるような顔をしているので、本当に天国に送ってやろうかと思った。

その後、統也を天国に送つとけば良かったと後悔しながら学校に着いた。

教室にはいるときも統也はついてきた。

「おまえ隣だろ、教室」

「いいじゃないか。大我きゅんのクラスにはさあ、かーいー女の子がいっぱい居るんだもん」

こればかりは死なないと直らないらしい。

仕方がないので無視して席に着く。

二年生になってからクラス替えをし、積極的に友達作りをしている。

「大我くん、おはよー」

笑顔で挨拶してきたのは朝倉美里。あさくら みさと

この学校の生徒では珍しいマトモな人間の一人だ。

「ああ」

でも正直、彼女とは話したくない。

なぜかというと、彼女と話しているときにでる周りからの強大な殺気が原因である。

彼女の容姿は、異性だけでなく、同姓まで近づけてしまう。

間違いなく萌えの部類に入るのだが、流石変態に浸食された高校と

呼ばれるだけあって、美里タン親衛隊と言つのが女子の中で密かに出来ているらしい。

お前らいいのか、こんなんぞ。

かく言う俺も何人かの男子生徒に目を付けられているしな。

どうしてこんな高校に入ったんだろ。

常々そう思う。

やがてHRの時間となった。

担任の碓氷先生はその名の通り、頭が薄い。

まあ、どうでもいいけどな。

だけど、薄い…いや違った、碓氷先生は一人の見たことない女子生徒を連れてきた。

編入生か？随分とベタだな。

（作者注　こんなのしか思いつかねえんだよ）

まず、第一印象はマトモそう。

変態の中にいるからまず、こんな目で見てしまうのだ。

容姿も悪くない。

薄い…もとい碓氷先生が黒板に彼女の名前を書く。

相変わらず字も薄い。

メガネかけても見づらいつつの。

「彼女は工藤玲香^{くどうれいか}さんだ。今日から…」

ここの先生の話は省略する。

文面の都合でな。

「工藤玲香です」

玲香は頭を下げた。

「胸おつきいし顔もよし。完璧だな」

その時、空いているはずのはずの隣の席から声がした。

「はあ…神出鬼没だな、お前」

隣に座っていたのは統也だった。

「いやあ噂の編入生はいかなる者かと見に来たワケだよ、カタブツメガネくん」

「だれがカタブツだ。それにメガネは余計だ」

編入生の軽い自己紹介が終わった後だった。

「毛利！なぜお前がそこにいる！」

「やばいバレた。トンスラ」

統也は逃げるように教室を出ていった。

「まったく。工藤さん、あそこの席について」

と、指を指したのは、さつき統也が座っていた席だった。

つまり、隣。

なんともベタな進行だな。

工藤が俺の横に座った。

「よろしくお願いしますね。ええと…」

「西条大我だ」

「西条くん…でいい？」

「ああ、呼びやすい名で呼んでくれ」

一般的なストーリーだと、主人公は転校生に一目惚れするようなパターンが多いのだが、この作者に限ってそんなことを書くわけがない。

もしくは変態どものおかげで俺の恋愛という感情が薄れているのか。

HRが終わり、頬杖をしてボーッとしていた。

だが、恒例というか何というか。

編入生の初日というのは、質問責めに合うものだ。

当然、隣の俺にも物理的なトバッチリを食う。

どさくさに紛れて俺の体を触ってくる変態もいるし。

じきに授業が始まるチャイムが鳴り、群がっていた奴らが自分の席や自分の教室へ帰って行く。

「大変だな、編入生も」

俺は何気なく呟いた。

「ええ。でも、結構楽しいわ」

ちゃんと耳に届いていたらしい。

「そう言ってられるのも今のうちかもしれないぞ。何せこの学校、妙な変態が多いからな」

その時、先生が入ってきたので、会話を中断した。

工藤がどう受け取ったかが気になったが、悪い方向には行っていない様子。

まあ、この学校に馴染んでくれれば良いんだがな。

かなり急に時間が進むが、放課後。

作者が面倒くせえとのことだから許してもらいたい。

特に書くことも無いから書かれても同じだと思っがな。

校門を出るとき、玲香がそこに居た。

誰かを待っている様子だ。

「あ、西条君」

話しかけられた。

「おう。誰かを待ってるのか？」

「うん。お姉ちゃんがクルマで迎えに来るから」

クルマで送迎か。

却って安全かもしれないな。

この高校なら特に当てはまる。

「あ、大我くん！」

呼ばれたので振り向くと、美里が居た。

美里の約50m後方に膨大な殺気が見えた。

たぶん親衛隊だろう。

「工藤さんもいるね。二人で何やってるの？」

「ああ、ただ話していただけた」

親衛隊の殺気が膨張してきた。

「ふーん。工藤さん、たしかさっきからここに居たよね？大我君を待ってたの？」

こいつ、とんでもない方向に振りやがる。

「残念だけど、実はお姉ちゃんを待ってるの。クルマで迎えにくるから」

「へえ。お姉ちゃんってどんなクルマ乗ってるの？」

「よく分かんないけど、実際に見てみたら分かるわ」

たしか、美里はクルマに興味があったな。

かく言う俺も結構興味がある。

そう言うことで、工藤の姉を三人で待つことにした。

学校の敷地内では、膨大な殺気が膨れ上がっていた。

美里タン親衛隊は、彼女の居ないところでは暴虐無人に振る舞うが、目の前にいると何も出来ない。

「あつ、来たみたい」

そこそこ大きい排気音を響かせて俺たちの目の前に一台の白いクルマが止まった。

「ランエボ…かな？」

「ああ、？だな」

ランエボは、三菱が誇るスポーツカーである。

スポーツカーでありながら4枚ドアであるため、きつちりと5人乗れる。

走るステージによってはポルシェやフェラーリより速いと言われるクルマだ。

工藤の姉が乗っているのはランエボ？で、グリルの三菱のマークにあわせた三角形が特徴である。

「なんなら乗っていく？お姉ちゃんに乗せたがり屋だから大丈夫よ」

これは願ってもないことだ。

実は何人か学校にストーカーが居るので助かる。

「でも私、反対方向だよ？」

美里が遠慮がちに言った。

「大丈夫だ、買い物も頼まれてるから」

と、工藤の姉が助手席の窓から顔を覗かせていった。

「遠慮せずに、乗ってくださいな」

工藤が後席のドアを開けた。

俺と美里はその好意に答えざるを得なかった。

まず俺が乗り、奥へ詰めて、空いたスペースに美里が乗る。

工藤は助手席に乗った。

「オレは玲香の姉、工藤良くどうりょう。よろしくな」

と、工藤の姉、良さんが運転をしながら言った。

口調が男っぽいとは思ったが、名前まで男っぽい。

まさに、名は体を表すとはこのことである。

おとなしそうな玲香とは違って、良さんは凛々しいと言ったイメージである。

「そ、そこを右です」

美里が緊張しながら道案内をしていた。

やっぱり年上の前では揚がってしまうんだな。

やがて、美里の家の前まできた。

「ここだね？」

「あ、はいっ」

良さんはクルマを止めると、美里の方を向いた。

「美里ちゃん、兄貴居るよね？」

「は、はい。居ますけど…？」

「なら伝えてくれないかな？工藤良って言うカッコ良くて超絶に美人な女の人が、次こそ勝つって言ってたってね」

「お姉ちゃん…」

工藤が苦笑いしていた。

「わかりましたあ。そっくりそのまま伝えときまあす」

美里はクルマから降りた。

「たのんだぞ」

良さんはクルマを出した。

「西条くん、こんなお姉ちゃんだから許してね」

「こんなとは何だ、こんなとは」

良さんは苦笑いした。

「大丈夫。俺の幼なじみも同じ性格だから」

その後、いろいろ話しているうちに工藤とも打ち解けた。

ケータイのメルアドも交換（半ば強制的に良さんのものも）した。

「じゃあ、また明日ね」

「おう、じゃあな」

クルマは排気音と、ブローオフバルブのプシャアアンという音を響かせて走り去った。

俺は黙って家に入った。

今日は親父は帰ってくる日じゃない。

自分の部屋に荷物を置いたとき、ケータイが鳴った。

「…もしもし」

電話に出たとき、心の中で舌打ちをした。

そして同時にしつこいと思った。

電話をかけてきた主は西条紀子^{さいじょうのりこ}。

俺の元母親…とは言い切れない存在だ。

母親らしいことは一つもしていないのに、離婚してからは唯一の息子である俺の親権を親父と争っている。

親権の決定権は俺にあるので、俺に自分の親権を主張させようとしているのだ。

だが、俺は決してそんなことはしない。

でも、行かなければ。

今日こそ…。

俺は制服から着替え、壁に掛けてあるキーをとった。

また、親父に怒られるかも知れないな。

そう思いながら、車庫のシャッターを開けた。

そしてDC5インテグラRの運転席に座ったのだった。

免許はある。

ただし正式なものじゃない。

親父がどこから作って持ってきたものだ。

年齢も、偽装してある。

この免許を貰ったとき、親父が言っていた。

「こいつはもしもの時の為の物だ。大事にしるよ」

そのもしもの時というのは未だ解らないが、とにかく自分的には有効活用はしているつもりだ。

クルマがスポーツカーで、しかもマニュアル（手動変速機）と言うこともあって初めは戸惑った。

だが、今となっては慣れたもの。

そこらへんのサンデードライバーより巧いと確信している。

道の流れに巧く乗り、目的地を目指す。

ここだ。このファミレス。

いつもはカフェとかなのだが、今日の指定場所はこのファミレスだった。

中に入るといらっしやいませと言う声が響く。

席の案内係に待ち合わせをしていると伝え、店内を見渡して紀子を探す。

すると喫煙席で化粧の濃い女がタバコを吹かしている。

間違いない、紀子だ。

ほかにそれらしい人は居ない。

俺は紀子の座っている席に着いた。

「何の用だ」

紀子はタバコを灰皿に押しつぶして火を消した。

「いきなり何の用だってないわよ、大ちゃん」

「馴れ馴れしくするな」

親父と離婚してからずっと親のフリをしている。

俺の前に水の入ったコップがおかれた。

「いいじゃない。私の子供なんだから」

「俺の親は親父しか居ない」

紀子はため息をついた。

「あのね、大ちゃん。私の元にいたら裕福な暮らしが出来るのよ？
あんなボロ屋に住むよりずっと良いと思うわよ」

「いや思わないな」

最初から答えは決まっている。

だから即答できた。

「それは物欲と言うものだ。それにあの家はボロ屋じゃない。見た
目も中身もだ」

親父が密かに貯めた金で造った家。

家を買う為の金を密かに貯めなくてはいけない理由を作ったのは紀
子である。

「遊んでばかりの貴様には解らないだろうが、親父はあの家を建て
るために危険なところに身を置いて働いたんだ」

その時、紀子がバンとテーブルを叩いた。

「ふざけんじゃないわよ！きれいなことばかり並べて…」

「俺は別にきれいごとを並べていない。並べているのは事実だけ」

俺はただ淡々と言っただけだ。

それは挑発でもあった。

「言いたいことはそれだけか。俺はもう帰る」

俺は怒りを抑えきれない紀子の後目にファミレスを出た。

「ちょっと待ちなさい！」

クルマに乗ったとき、紀子がファミレスから出てきた。

何か叫んでいるようだが、無視をした。

いちいち聞いていたら面倒なことになる、と自分に言い聞かせていた。

本心は…解らない。

ただ紀子が憎いだけなのか、それともあの剣幕で来られて逃げたかったのか。

ともかく、俺は奴を母親だと思わない。

絶対に…

「思いたくねえ」

こんな眩きもクルマの排気音によってかき消され、わずかに自分の耳に届いただけだった。

家に帰り、クルマを車庫に入れた。

その時、ふとケータイを見るとメールが一通届いていた。

工藤：いや、玲香からだ。

メルアドを交換する際、下の名前で呼んでは言われていたのだ。

内容は、

「届いてる？」

であつた。

教えられたメルアドが合っているかどうか確認したかっただけらしい。

俺は

「ちゃんと届いた」と返信した。

そして、冷蔵庫を覗いて今日の夕食を考える。

確か、明日は親父が帰ってくる日だったな。

なら買い出しに行かないといけない。

流石に卵と野菜が数種類では少なすぎる。

… 今行こう。

これだと夕食もままならない。

それにもうすぐタイムセールの間だ。

1時間後、タイムセールのおばちゃんパワーに押されてクタクタになりながら帰ってきた俺は、今晚の夕食を作るのだった。

翌朝。

俺はいつも通り学校へ向かったは良かった。

「西条！貴様あー！！」

大体予想はついていた。

美里タンファンクラブの面々が俺が登校するところを待っていたのだ。

親衛隊があればファンクラブもあっても不思議ではない。

「美里様とクルマで隣同士に座って帰りやがってえ…羨ましいぞ！」

馬鹿げている。

こんなのは無視に限る。

「待て！逃げるつもりかっ！？」

こいつら知らないのか、逃げるのも戦略の一つだと。

変に関わると面倒だ。

その時、ファンクラブのメンバーが校門の方へ戻っていった。

やっと諦めたのか？

俺が振り返るとファンクラブの面々は一人の女子に絡んでいた。

俺と同じ態度で迫っている。

あれは…玲香じゃないか！

俺は急いで引き返した。

「バカか？おまえ等」

玲香の前に立った。

「バカだとう？」

ファンクラブの面々は全員俺を睨みつけていた。

「おまえ等は美里の何だ？美里に近づいた奴に脅しをかける集団か？そんなもん、バカ以外の何でもねえだろ」

「た、大我君…」

「それに工藤はまだこの学校に慣れてないんだ。脅えることだってある。なんで進んで脅えさせようとするんだ」

ファンクラブの面々は黙ってしまった。

「あつ大我くん」

と、美里が現れた。

その瞬間にファンクラブ全員が顔を赤くしてしまった。

「美里か」

「えっと…何？この状況」

俺は要約して美里に状況を説明した。

「…ということだ」

「うわっサイテーだね」

その瞬間、ファンクラブの周りの空気が百倍くらい重くなった。

「それより玲香ちゃん、お姉ちゃんのことをもっと教えて」

「い、いいケド」

玲香はチラッとファンクラブの方をみた。

「大丈夫。時間がたてば治る」

少し困惑しているようだが、美里に手を引かれて歩き始めた。

俺はファンクラブの方をチラッと見てから二人の後ろを歩いた。

校舎に入った後も親衛隊が縄を張っていたが、美里が居るので手を出してこなかった。

そして一番恐れていた時間は過ぎた。

だが、それはすでに過去形。

同じくらい恐れなければならない時間が出来たのだ。

次に恐れなければならない時間。

昼休みだ。

俺は昨日の夕食の残りを取りあえず突っ込んだ弁当を食っていた。

玲香との親睦を深めようと女子の軍団が彼女の周りに集まる。

それはそれで親衛隊の連中は手を出しにくいだろう。

「あれ？珍しいね、弁当だなんて」

と、言って近づいてきたのは美里だった。

パンを持ちながら目の前の席に座った。

「まあな。たまには弁当でも悪くないと思ってな」

そうだ。このまま美里との話を続ければ玲香と俺の身も保証されたも同然だ。

「ふうん。そういえば大我くんってクルマに興味あったんだね。以外だったよ」

俺は少しズレたメガネを掛け直した。

「それはこっちのセリフだと思うな。女子でクルマに興味あるなん

てなかなか見ないぞ」

「あら、玲香のお姉様だってクルマ好きですよ。もしかしたら玲香ちゃんもそうかも知れないし」

「確かにな」

空になった弁当箱を俺のカバンにしまった。

「そういえば、好きなクルマって何？」

「ずいぶんと唐突だな。まあいいか。…DC5インテグラRかな？」

「へえ。もしかしてホンダ党？」

「うーん、メーカーが好きって訳じゃなくて、クルマ自体が好きってことになる…な。うん」

「そうなんだあ」

どうやら理解して貰えたらしい。

「かく言う美里は何なんだ？」

「えっ？」

美里は何故かびっくりした様子。

「何を勘違いしてやがる。クルマだよ、クルマ」

「あっ…ああ、うん」

なぜか動揺している。

「どうした？」

「うん。いつつも言つとやめておけって言われるからあんまり言いたくないんだ…」

「そうか。言ってみ？」

「でも…」

躊躇っているところを見ると、これは重傷だな。

中途半端にクルマに詳しい奴にしか話したことがないらしい。

「美里、これ見てみ」

「何？」

俺は右手に乗せた十円玉を見せた。

「俺が今からこれを弾く」

「うん」

「弾いたら表が裏が上になるな？」

「うん」

「弾いていない今、弾かれた後のコインの表裏なんか解るか？」

美里は首を横に振った。

「だろ？ やつてみないとその後の事なんか解らない。だから言ってみないと相手の反応なんて解らないんだよ」

「…わかった」

どうやら成功したようだ。

そして、本当にそのクルマが好きなんだな、と思った。

美里は大きく深呼吸をした。

「あのね、R33GT-Rが好きなの」

「33か。結構好きだよ、あれ」

「えっ？」

「みんなはあれは失敗作だからやめとけっていったんだろ？」

美里は静かに頷いた。

「あれは失敗作なんかじゃないんだ。33は高速域での安定性は34GT-Rよりいいんだ。32も33も34もGT-Rはそれぞれ一長一短。好きなクルマは好きなままでいいんだよ」

日本語的に文の順番がおかしい気がしたが、大丈夫だ。

「うん、そうだよね」

その時、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

親衛隊の奴らが来なくてよかった。

「えっと…」

美里が自分の席に戻ろうとした時、何かを言いたげにしている。

「ありがと…ね」

「ああ、どういたしまして」

美里が話しかけてきたときより笑顔になっていたのが解った。

「あつ次体育だったか」

うっかりしていた。

俺はジャージを持って更衣室に向かうのだった。

今回の体育はいつもより疲れた気がする。

と、というか体のあちこちが痛い。

内容はバレーボールであったのだが、親衛隊の連中が俺に集中攻撃してきたのだ。

もう、敵味方関係なく。

試合でなくとも不意にボールをぶつけられ、合計は28回に及ぶ。

保健室に行くほどでもないのでここにいるのだが…。

今、帰りのホームルームが行われているが、担任の薄い…いや碓氷先生の話はまったく聞いていない。

どうせ聞かずとも困らない話だ。

明日以降も大変だな。

つと、明日は土曜で休みだった。

「大我君、今日もお姉ちゃんが来るから一緒に帰る？」

カバンに道具を詰め終えた玲香が言った。

「そうだな、行くか」

その時だった。背中に衝撃が襲ったのは。

俺はその反動でメガネを机の上に落とした。

「よう大我！羨ましいぞっ！」

やはり統也だった。

お得意の背中をグーで殴る行為は直る気配がない。

「だ、大丈夫？」

玲香はむせる俺を心配してくれているらしい。

「大丈夫だ……」

「くうゝ羨ましいぜ西条大我あ！もう噂の編入生と仲良くなっちゃったのかよお」

相変わらずテンション高い奴だ。

俺はメガネを掛け直した。

「コイツは毛利統也。俺のストーカー兼金魚の糞」

「ひどっ！つか糞呼ばわり？」

「しるか。とつとと離れやがれ」

「フッフッ。仲がいいのね」

玲香が間に入った。

すごく自然に。

「いやあどー…」

「コイツなんかと一緒にしないでくれ」

俺はカバンを肩に掛け、教室を出た。

「あつ待って！」

玲香がその後を追ってきた。

結果、統也は教室にポツンと残されたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7686f/>

徒然に行く

2010年10月28日07時34分発行